

## 書 評

上智大学中世思想研究所編訳／監修

# 『中世思想原典集成15 女性の神秘家』

高 橋 雅 人

「女性に哲学はできない」と言ったのが誰だかは知らない。詮索する興味もない。たとえ誰が言い出したことであろうと、この発言がハンナ・アーレントやシモーヌ・ヴェイユといった優れた女性哲学者を生み出した20世紀を経たわれわれにとって、全く意味のないものであることは言うまでもないだろうから。だが果してこの世迷い言を否定するのに20世紀まで待たなければならなかったという認識は正しいのだろうか。実はそれは近代以降の偏見だったのではないか。このような感慨を評者に抱かせた書物、それがここに取り上げる編訳／監修上智大学中世思想研究所（監修者・富原真弓）『中世思想原典集成15——女性の神秘家』（以下、「本訳書」と呼ぶ）である。

本訳書は1000ページを超える大部の書で、収録された著作は18篇、すべて本邦初訳、あるいは新訳だという。偉大な訳業と言われるべきであろう。書名から明らかなように、本訳書は全20巻からなる『中世思想原典集成』のうちの一冊である。ちなみに、このシリーズ全体は昨年、2002年に完結した。これもまた偉大な、しかも豊饒な中世思想が日本語で読めるようになった喜ばしい出来事であると言ってよい。

この集成全体にも本訳書にも当てはまるのだが、収録されている著作が抜粋であることが時にある。できれば著作の全体が収録されているのが望ましいだろう。しかしながら、今まで知られていなかった豊かな思想的鉱脈を多くの人々に知っていただくには、できる限り多くの著者を紹介するという方針は是

とされてよい。

さて、本訳書に話を戻そう。本訳書は、ヨーロッパにおける中世の時代に生きた女性——修道女も在俗の信徒も——らによる書を集めている。神からの賜物として不思議な才能を授けられ、その能力に基づいて見られた幻や語られた異言が収録されている。収録されている著作18篇をその順に記せば、以下の通りである。時代と地域の広がり認識するために、著者の活躍した地方と生没年とを併せて記すことにする。

ビンゲンのヒルデガルト『スキヴィアス（道を知れ）』（ドイツ、1098—1179）

『隠遁修道女戒律』（著者は男性、おそらくアウグスティヌス修道参事会士、イギリス、13世紀）

ハデウェイヒ『幻視』（フランドル地方、13世紀前半）

ナザレトのベアトレイス『愛の七段階』（ベルギー、1200—68）

マクデブルクのメヒティルト『神性の流れる光』（ドイツ、1207頃—82頃）

マルグリット・ドワン『鏡』（フランス、1311没）

ハッケボルンのメヒティルト『特別な恩寵の書』（ドイツ、1241／42—98／99）

フォリーニョのアンジェラ『幻視と教えの書』（イタリア、1248頃—1309）

ヘルフタのゲルトルート『神の愛の使者』（ドイツ、1256—1301／02）

マルグリット・ポレート『単純な魂の鏡』（フランス、1310没）

クリスティーネ・エーブナー『溢れる恩寵についての書』（ドイツ、1277—1356）

マルガレータ・エーブナー『主の祈り』（ドイツ、1291頃—1351頃）

スウェーデンのビルギッタ『天使の説教』（スウェーデン、1303—73）

ノリッジのジュリアン『神の愛の啓示』（イギリス、1342—1416以降）

シエナのカタリナ『書簡集』（イタリア、1347—80）

マージェリー・ケンプ『マージェリー・ケンプの書』（イギリス、1373頃  
－1438以降）

ローマのフランチェスカ『幻視』（イタリア、1384－1440）

ジェノヴァのカタリナ『煉獄論』（イタリア、1447－1510）

おわかりのように、地域的には、ドイツ、イギリス、イタリア、ベルギー、スウェーデンにわたり、時期としては12世紀から16世紀までの5世紀以上にわたっている。これだけの時空の広がりを持った諸著作をまとめる視点が、本訳書の副題「女性の神秘家」であろう。ところが、監修者によればこの「女性神秘家」という概念は「多分に近代的なバイアスを経た、すぐれて歴史的な産物である（「総序」p. 9）」という。女性は男性よりも「情緒的」で「非理性的」だという「通説」と、「神秘家」としてしか公認されなかったという現実とが、その概念の形成に力があつた。「異端者」や「魔女」の「誕生」にも同じ力学が働いているとされる。事実、本訳書に収録されている著者たちのうちには、ビンゲンのヒルデガルトやシエナのカタリナなどのように列聖された女性もいる一方で、マルグリット・ポレートのように異端の嫌疑から火刑に処せられた女性もいる。

「女性神秘家」という呼称が近代の偏見に基づくものだとしても、中世という時代が女性に課す制約は多かつたに違いないと思われるかもしれない。確かに現代とは比べ物にならないほどの制約があつたと言っても、完全に間違いであるとは言えないだろう。しかしながら、さまざまな制約を受忍し、それを基礎条件としながらかえって豊かなものを産み出す強さを持つ女性は、どのような時代であっても存在する。本訳書に収められた著者たちは——時の教皇にも影響を与えたビンゲンのヒルデガルトやシエナのカタリナも、火刑に際して毅然とした態度を崩さなかつたマルグリット・ポレートも——皆そのような女性であつた。

それではそのような女性たちの書き残した書はどのようなものであつたの

か。ここではとても全部を紹介することはできないので、二つだけ取り上げることにする。

まず最初に、スウェーデンのビルギッタ『天使の説教』を見てみよう。

著者スウェーデンのビルギッタは、13歳で結婚、8人の子供に恵まれたが、夫の死後、幻視者として活躍する。自らは修道女ではなかったが、女性のための修道会ビルギッタ会を創設する。この修道会は女性による女性のための修道会であり、女子修道院長は言わば聖母マリアとして大いなる権威を有するものとして考案されていた（もっともこの構想は教皇庁によって修正された）。ビルギッタは教皇の権威そのものには肯定的だったが、墮落した社会秩序を批判し、病者や貧者を助け、民衆の絶大な人気を誇ったという。

『天使の説教』はそのようなビルギッタに天使が現れ、修道女に読むべき書物を指示したという内容の書である。天使は日曜日から土曜日までの一週7日間、それぞれ3回、合計21回の読書課に読むべきものを指定した。日曜日には神が創造以前に聖母マリアをどのように選んだか、月曜日には天使たちがどのように聖母が創造されるかを知り喜んだか、が読まれる。火曜日はアダムの悔悛と慰めについて読まれる。ここでは「アダムが惨めな状態になった後、神の意志に不従順であったという記録はない (p. 805)」と、また、アダムが「あらゆる完徳において輝いている一人の人、エバと同じ体を持った一人の人間から、神は人間の身体をとることを望んだ (pp. 805-6)」ことを信じていたと語られるのが興味深い。

水曜日はマリアの誕生について、木曜日はマリアが神の子を身籠もったことについて読まれる。そして金曜日にはキリストの死によるマリアの苦悩と毅然たる精神について読まれる。マリアの魂はキリストが「苦しみを受ける前に激しい苦悩に翻弄された (p. 827)」にもかかわらず、その苦悩によって「息を引き取らなかったのだから、神がそのとき小さくない奇跡を行った (p. 828)」という。そして最後の土曜日にはキリストが復活したことをマリアのみが揺らぐことなく信じ、天に挙げられたことが読まれる。「すべての天使と人間のう

ちで最も謙遜な者であることが明らかになったので、処女は、あらゆる被造物のなかで最も優れ、最も美しく、神に最も近いものとされた (p. 833)」のである。

このように『天使の説教』は、創造や歴史、コスモロジーや天使論などをも含み込みつつ、マリアの生涯を言わば脊髄として、旧約聖書から新約聖書を全体にわたって読むことを修道女たちに定めている。読むべき書を定めることができないばかりか、そもそも書を読むことすら伝えることのできない社会は、この『天使の説教』から何かを得ることができるだろうか。

次に、ナザレトのベアトレイス『愛の七段階』について見てみよう。

今日のベルギーのティーネンに生まれたナザレトのベアトレイスは、シトー会修道女であり、30年あまりナザレト修道院の院長を務めた。当時ブラバント地方で盛んになっていたベギン運動とも関わりがある。『愛の七段階』はラテン語ではなく、中世ネーデルラント語で書かれた「もっとも古い散文テキストの一つ (『訳者解説』 p. 413)」であるという。

『愛の七段階』の冒頭の一文、「愛には七つの段階があり、最も高いところから来て、再び頂に戻る」は、この書の主題を簡潔に語っている。愛である神の似姿としてつくられた人間が、再び上昇の道行きをたどり、神と「一つの霊」となるというこの書を貫く構造は新プラトン主義的なものである。しかし「神と魂との神秘的な合一を男女の恋愛に喩え (『総序』 p. 15)」ているのは、旧約聖書の『雅歌』以来の、そしてその『雅歌』への多くの註解の伝統に即したものである。

ベアトレイスによれば、愛の第一段階は憧れである。次に、魂は「ただ愛だけによって主に仕えたい (p. 418)」という第二段階に達する。すると大きな苦しみがやって来る。愛を追求するが「何をしても満たされず、安らぎを感じ (p. 419)」ないからである。これが第三段階である。続けて「この上ない喜びと深い悲しみをこもごも味わ (p. 420)」う第四段階に至る。そして第五段階では「自分を超えていくかのよう (p. 421)」だという。この段階においても

魂はいたるところで「傷つ (p. 422)」く。「愛はあらゆる理解をはるかに超えているので、魂は愛を享受できない (ibid.)」からである。この段階の上の第六段階では、魂は「安らぎを味わって、まったく自由に振る舞うことができ (p. 423)」るようになる。ベアトレイスはこの段階の魂を「一家の主婦 (ibid.)」に喩える。「家事をうまく切り盛りし、慎重に段取りをつけ、上手に工夫し、用意周到にまた賢明に家族を守り、分別のある働きを (ibid.)」する主婦のように、魂も行うからである。

ではいったい最後の第七段階とはどのようなものなのであろうか。完全な自由を享受する第六段階を超える段階とはいかなるものなのであろうか。だがそれは本訳書に任せるべきであらう。愛が下の段階を超えて上っていくように、本訳書に比べれば搾りかすにすらならないようなこの書評を捨てて、ベアトレイスのテキストそのものにあたってみるべきである。

どのような思想も時代の制約から逃れることはできないというのはおそらく正しい。だがその制約のゆえに自らの属するのとは異なる時代の思想を直ちに否定してしまうことは、現代の制約ではあるまいか。そのように考えるきっかけを本書は与えてくれる。

(平凡社、2002年4月、1,061頁、本体10,000円+税)